

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：13801

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2014

課題番号：23531221

研究課題名(和文)言語力の体系と育成に関わる基礎的研究

研究課題名(英文)The basic research about the system of language skills and how best they can be fostered

研究代表者

坂口 京子(SAKAGUCHI, Kyoko)

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：60440591

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、問題を発見・追究・解決する過程に働く言語力の体系と育成について明らかにすることである。柳田国男監修教科書(1953-1954)と現在の先進的実践(2012-2013)を架橋する視点から、言語力育成においては、選択すること・再出することの行為化が重要であることが明らかになった。その対象となるのは語や表現、表現形式などである。第八次学習指導要領(2008)は小学校第1・2学年で目的的な選択する行為を重視しているが、言語力育成において重要になるのは、この選択する・再出することの能力・態度を螺旋的かつ系統的な指導によって継続的に養成していくことである。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to investigate the system of language skills that contribute to the discovery, investigation and resolution of problems, and how best they can be fostered. Taking a viewpoint of bridging between the textbook edited by Kunio Yanagida (1953-1954) and today's advanced teaching practices (2012-2013), the study indicates the significance of focusing on selecting and reproducing words, expressions, sentence structures and so on in the language education, and fostering those abilities. The eighth curriculum guideline (2008) includes the act of selecting as an objective in the guidance for the first and second grades in elementary school. The core of language education is to cultivate the ability and willingness to make choices in a spiral and systematic fashion.

研究分野：教科教育学

キーワード：言語力 カリキュラム 教育課程

1. 研究開始当初の背景

文部省(現:文部科学省)によって提起された1990年初頭の「新しい学力観」、1998年の「総合的な学習の時間」の教育目標は各教育現場において実践研究されている一方、なお「学力低下」の批判を受けて十分に定着されるまでには至っていない。他方、OECDによる国際学習到達度調査が問うリーディング・リテラシーは、2008年の第八次学習指導要領においても重視され、以下の特徴として明示されている。一つは、全教育活動において言語活動を重視し、言語力を育てることであり、もう一つは、国語科の学習において、言語活動を通して全教科の学習を支える言語力を育てることである。

ここで目指される言語力は、従来の学力観で主流であった「国語科」教育という枠組みで論じられるものではない。重要なのは、全教育活動を通して育成される言語力とは何か、その定義を明確にすることであり、言語力の内実と体系を、国語科独自の知識技能や教材内容との関連において、他教科や総合的な学習等との関連においてそれぞれ考究し、との共通点と差異を明確にすることである。

しかしながら以上の視点に立つ研究の蓄積は十分ではない。近年、教育現場において言語能力や思考力の系統化の試みや、言語活動を重視した実践案が発表されているが、いずれも現在の視点からの単独研究にとどまる。また、総合主義的・問題解決の学習が展開された戦後新教育期への注目はさまざまになされてきたが、先に述べた視点に立つ研究は関係の限りなされていない。歴史的研究と現在の実践研究とを架橋する研究方法もまた未開拓である。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、第八次学習指導要領において求められる「言語力」の体系を解明し、育成にあたってのスタンダードを小学校・中学校において構築することである。

戦後初期に展開された先行実践(カリキュラム・教科書)を整理、分析し、以上の知見から、思考力、知的能力、方法知との関連を図った言語力の体系を構想し、全教育活動(全教科、総合的な学習の時間、特別活動)において育てるべき言語力と、国語科独自で育てるべき言語力との共通点と差異を明らかにする。その上で、現在の言語力育成の実態に照らし、言語力を育成する上でのスタンダードとなる学習方法、実践事例を教育現場、関係学会に提言する。

(2)研究期間内に明らかにしようとするのは、以下の3点である。

思考力・知的能力・方法知の内実と体系との関連において、言語力の内実と体系はどのように定位されるか。

全教育活動に働く言語力と、国語科固有の

知識技能や言語力とはどのような関連があるか、国語科独自で培うべき言語力育成においてどのような点を重視すべきか。

言語力育成を目指す上で、学習内容・学習方法にどのような配慮が必要か。

3. 研究の方法

(1)戦後新教育期に展開されたカリキュラムや教育課程基底案、国語科・社会科教科書の調査を実施、これまでの研究成果とともに総括し、言語力の概念と内実を整理、分析する。

(2)小・中学校における授業を言語力育成の観点から実態調査する。その特徴と課題を歴史的調査の知見に照らしつつ総括し、言語力の体系と育成に関わる基本的枠組みを設計構築する。

実際の授業記録・分析にあたっては、以下の学校および先生方にご協力いただいた。

静岡大学教育学部附属静岡小学校(芳賀純一教諭)

常葉大学教育学部附属橘小学校(木村都教諭・池端克文教諭・田原弘之教諭)

静岡市立安倍川中学校(下田実教諭)

4. 研究成果

(1)学校教育全体で展開される言語力育成においては、各教科および領域において問題解決の学習が展開されるが、その際、学習者の疑問(問い・問題)の醸成を最も重視しなければならない。問題を解くこと・問題を追究すること・問題を発見することを易から難へと捉え、各過程において以下の認識能力を段階的に指導していくことが重要である。その際、教育内容の価値・特徴との連関を果たす学習指導が必須となる。

言語化能力(感受・符号化・事実との照合・順序・価値づけ・意味化)

論理的思考力(比較・分類・名づけ・推論(類推・帰納・演繹・仮定)・総合(関係づけ・一般化・構造化)・創造(想像))

判断力(好悪・選択・抽出・決断・展望)

(2)思考力・知的能力・方法知との関連において言語力を育成する上では、全教育活動においてそれぞれの意思決定過程を重視し、「選択する」「再出する」ことの行為化を指導・支援しなければならない。これは先に触れた(1)の・・・を連関する上で、「選択する」「再出する」ことを重点化するということである。

以上は昭和28・29年度版柳田国男監修教科書の特色から明らかになった点である。同教科書においては、国語科・社会科において探究型学習に働く能力・態度が構造化されるとともに、選択する・再出することの行為化が重点化されていた。

ここで言う「選択する」は、授業構想の様々

な位相に働く現象である。まず認識能力の中で重点化し、その行為化までを目指して螺旋的かつ系統的に支援する対象である。また学習の目的・場に指導者が意識化することで、認識対象・認識能力・認識活動の動的連関を起動する機能でもある。一方の「再出する」は、選択することを契機としての言葉化であり、材のある表現行為全般である。選択する場に立つことで判断しようという意思・思考が立ち上がり、理由・経緯が言葉化される。また根拠（叙述・条件等）から、あるいは根拠と根拠（叙述と叙述、条件と条件等）とを関係づけて、あるいは場（条件・型、表現形式等）に即した叙述や表現を選択して、言葉はうみ出される。説明や再話、要点や要旨の再構成、適切なキーワードの選択・再出がその主なものである。国語科においては他に表現形式の転換、空所の想像等がある。

以上は全教育活動・国語科において重視すべき点である。国語科独自で培うべき言語力育成においては、さらに以下の点が重点化されなければならない。

事象・事実の感受・観察・分析にかかわる語・意味の選択

問題解決（目的や場）に即した語・叙述の選択と関係づけ

問題解決（目的や場）に即した表現形式・構想・方法の選択

類義の語、同内容の表現形式の比較・選択
その体系・育成のモデルとして右の資料がある。これは柳田国男監修「改訂 新しい国語」(昭和28・29年度版)を先の観点について整理したものである。「選択する」「再出する」は、材となる認識対象（教科書やその他資料）や学習指導（何を選擇させ、何をどう再出させるか）、単元構想や単元配置の工夫により螺旋的かつ系統的にその行為化が目指されている。その特色は次の点に整理できる。

第一に、語の選択、語の意味の選択が、事実・真理をどう感受・知覚・理解するかという点で重視されている。資料に明らかなように、選択意識の醸成は、叙述 表現 表現形式 構造 方法 評価すべきモノ・コトに対して図られていく。観点はまず事実・真理に照らすこと、もう一つは目的・場に即することである。

第二に、真理探究を目指す学習の「各過程」に働く認識能力を段階的に指導している。各過程は、問題を解くこと 問題を追究すること 問題を発見することが易から難へと捉えられ、[経験としての行為 知識・技能のモデル提示 高次の行為化]という段階的指導が行われている。問題を発見して探究するという一連の学習は、小学校では中学年、中学校では2学年以降での取り組みとなる。

第三に、問いのつながり、知識・技能のつながりが年間・発達段階を見通して仕組まれている。題材と題材、単元と単元、[経験としての行為 知識・技能のモデル提示 高次

資料：柳田国男監修「改訂 新しい国語」(昭和28・29年度版)

	選択する行為	選択する対象・思考技能	再出する行為	
低学年	ある観点から着目すべき叙述を選択する	客観的な叙述(形容、行動、場所、順序等)	見たもの・経験したことについて話す	長編を読み通す
		主観的な判断(おもしろいところ、心に残ったところ)	視写する	
		絵と文との関係づけ(類推)		
中学年	関係づけるべき叙述を選択する	叙述同士の関係づけ	再話する(読んだもの)	
		根拠と理由との関係づけ	理由や語について説明する	
		抽象と具体の関係づけ	書き抜く(メモする)	
高学年	評価すべきモノ・コトを選択する	事実と事実の関係づけ(比較・類推)	自分の経験したことを記録する	
	事実に即した表現を選択する	事実と表現形式との関係づけ	要点を書く	
		経験と表現との関連づけ	観点にそって内容を書き替える(物語やシナリオ)	
中学校	目的に応じた叙述を選択する	表現と表現との比較	想像できることを書く	
	目的や場に即した表現形式・文種・構想を選択する	モデル(表現・内容)と事実・経験との比較	観点にそって内容を書き替える(新聞やラジオ)	
		表現形式と表現形式との比較	大意と要点、要旨を書く	
	目的や場に即した作業方法(学習)を選択する	事実の認識(問題の発見)	聞き書き・レポートを書く	

の行為化]の連関と配置により学習者が問いをうみ出したり、学習の意味や価値を再構成・再発見したり、培ってきた技能を活用したりできる。学習の意義や知識・技能は学習者自身が選択し再出するものとして位置付けられている。

(3) 国語科独自で培うべき言語力育成においては、学習内容・学習方法において以下のような配慮が必要である。

語の選択、語の意味の選択が、単元創造と学習構想の核にあること。

学習目的と学習指導、教材との連関が果たされていること。

学習の手順や方法、評価を「学習の手引き」等によって具体化すること。それにより、単元全体の見通しを持たせるとともに、意味ある振り返りをさせる。

学習の段階性、順序性、螺旋性がふまえられていること。学習者がそれまでの自身の学びを振り返り、補強・改善することのできる指導となっていること。

学習者自身が選択する場に立つ課題(発問) あるいは余地や領域を設定すること。後者の例として、a 個々に対応する課題や手

引きを複数準備して選択させる、b好みや個性といった主観的判断を尊重して選択させる、c次の目標や到達度、課題、留意点等について選択したり言葉化したりできる場を設定する等がある。

学習過程において語の選択、語の意味を選択し言葉化する過程を重視すること。その際、事実や真理を探究する態度育成を基盤とする。

学習方法としての視写（書き抜き）・書き込み等を小・中学校の各段階で継続的かつ学習目的に応じて指導すること。着目すべき・関係づけるべき語の選択とそこからの再出をメモ、速書き、関連づけのための記述方法（図示化・図表化等）として具体的に指導する。

発言を交流する過程や、文章の作成過程においては、よくわからない認識状況を言葉化して明確化あるいは全体化する思考（葛藤・逡巡）過程を重視すること。

（４）成果の位置づけ

歴史研究の新たな研究的視座を提示したことである（坂口 2015a）。

甲斐雄一郎氏（2015）は「国語教育史の第三次的研究」の一つとして「類似性を発見して考える」という方法を挙げている。「時間を隔てた二点間に類似性が認められる政策や主張が現われること」に注目して「問題を設定しようとする」同研究は「現在求められる教育実践の合わせ鏡とすること」を「期待する」ものである。

理科教育研究の立場からも同様の指摘がある。大高泉氏（2015）は「現在、当然ないし必然と思われている理科教育事象に対して、理科教育史研究は当該事象の成立・展開を検討し、我々を絶対化固定化から解放する可能性を開くものである」と述べ、その重要性を指摘している。

本研究は以上の「国語教育史研究の第三次的研究」の試行の一つであり、現在の施策および実践を相対化する一視点を提供したと考えられる。

言語力育成における学習モデル、系統案、実践的課題を提案したことである。

国語科の実践事例として、小学校では芳賀純一教諭（静岡大学教育学部附属静岡小学校）、中学校では下田実教諭（静岡市立安倍川中学校）のカリキュラムおよび系統案、授業構想を取り上げ、モデルとして一般化し、学習内容・学習方法のスタンダードとして提案した（坂口 2013・2015b）。

他教科を含めた言語力育成においては、木村都教諭・池端克文教諭・田原弘之教諭（常葉大学教育学部附属橋小学校）の授業記録を分析し、学習内容・学習方法のあり方について改めて提案する予定である（（５）今後の展望 において後述）。

さらに実践的課題として、「選択する」「再

出する」ことの行為化を支援することの重要性を指摘した（2015b）。第八次学習指導要領国語科編（2008）は小学校「C読むこと」の「指導事項」第1・2学年に「才 大事な言葉や文を書き抜くこと」「力 楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと」を示し、選択する・再出することを重要かつ基本的な能力・態度に位置づけている。しかしながら「大事な」観点から叙述を選択する、「選んで」読むという能力・態度はきわめて高度なものであり（坂口 2013）、何をどう選択しどう再出するかを継続的かつ螺旋的に「支援」し、その「行為化」を目指さなければならない。そのことが言語力育成においてきわめて重要であり、現在の実践的課題を解決する一助になると考えられる。

（５）今後の展望

国語科以外の教科・領域の実践を言語力育成という観点から改めて分析することである。特に「選択する」という認識能力の育成と、「再出する」際の指導は具体的にどのような点に留意すべきか、検討を加えていきたい。

の中でも、「選択する・再出する」ことが発達段階とどのように関連して配置されるべきかを検討することである。言語力育成において基本となる視写（書き抜き）・書き込み・書き替えはどの教科・領域でどのような段階を捉えて指導していくべきか、継続して考察していきたい。その際、海外との比較研究（例：シュタイナー教育における「フォルム」等）も検討している。

<引用文献>

甲斐雄一郎、国語教育史の第三次的研究 話すこと・聞くこと、国語教育史研究を例として、国語科教育、全国大学国語教育学会、77巻、2015、pp.3-5

大高泉、理科教育史研究の意義、国語科教育、全国大学国語教育学会、77巻、2015、pp.6-8

坂口京子、昭和 20 年代後期に学ぶ、平成 20 年代今後の展望 「国語教育史の第三次的研究」からの試行、国語科教育、全国大学国語教育学会、77巻、2015a、pp.9-11

坂口京子、言語力育成における「選択する・再出する行為」、柳田国男監修教科書と現代の先進的実践を架橋する観点から、静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、23号、2015b、pp.1-14

坂口京子、選択する・再出する言語活動の有用性、常葉大学外国学部紀要、30号、2013、pp.96-105

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

下田 実 (SIMODA, Minoru)
芳賀 純一 (HAGA, Junichi)

〔雑誌論文〕(計5件)

坂口 京子、昭和 20 年代後期に学ぶ、平成 20 年代今後の展望 「国語教育史の第三次的研究」からの試行、国語科教育、全国大学国語教育学会、査読有、77 巻、2015、pp.9-11

坂口 京子、言語力育成における「選択する・再出する行為」 柳田国男監修教科書と現代の先進的実践を架橋する観点から、静岡大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、査読有、23 号、2015、pp.1-14

坂口 京子、選択する・再出する言語活動の有用性、常葉大学外国学部紀要 査読有、30 号、2014、pp.96-105

坂口 京子、柳田国男監修「改訂 新しい国語」(昭和 28・29 年)に関する考察-文学的文章指導の実際-、静岡大学教育学部研究報告(教科教育学篇) 査読有、45 号、2014、pp.29-38

坂口 京子、柳田国男教科にみる言葉の教育-「改訂 新しい国語」「日本の社会」の関連性を観点として-、月刊国語教育研究、査読有、496 号、2013、pp.50-57

〔学会発表〕(計2件)

坂口 京子、国語教育史の第三次的研究シンポジウム、全国大学国語教育学会、2014 年 11 月 8 日、筑波大学(茨城県・つくば市)

坂口 京子、言語力育成における選択する・再出する行為-柳田国男監修「改訂 新しい国語」(小・中学校)を中心に、全国大学国語教育学会、2014 年 5 月 17 日、ウインク愛知(愛知県・名古屋市)

〔図書〕(計1件)

坂口 京子、沼津国語同好会、静岡学術出版、(仮)言語活動としての視写・書き込み・書き替え、2015

6. 研究組織

(1)研究代表者

坂口 京子 (SAKAGUCHI, Kyoko)
静岡大学・教育学部・准教授
研究者番号：60440591

(2)連携協力者

中村 孝一 (NAKAMURA, Koihi)
常葉大学・教育学部・教授
研究者番号：30329510

(3)研究協力者